康太の昼食

河﨑 秋子（作家）

康太は腹が立っていた。冬休みのよく晴れた昼前、両親はそれぞれ仕事に行っていて、家には自分ひとり。怒りをぶつける相手もいない。

リビングに差し込む日の光はぽかぽかと康太の体を温めてくれる。とても穏やかだ。

けれど、康太のいらだちは収まらない。

宿題をやる気にはならないし、ゲームはこの間クリアしてしまった。やりたいことがない。だから余計に、怒りが頭の中でぐるぐると渦を巻き続けていた。

そういえば、まだお昼ご飯を食べていない。お母さんが「冷凍庫から出してレンジで温めて食べてね」と言っていたミールキットは康太が好きなチーズ入りハンバーグだけれど、素直にそれを食べる気にはなれなかった。

「誰が言われた通りになんてするもんか」

言いなりになんてならない。自分で勝手に好きなものを作って食べてやる。康太は立ち上がると、台所に向かった。

冷蔵庫と食料棚から、目当ての食材を取り出す。パック入りご飯、のり、卵、ランチョンミートの缶詰。これさえあれば、好物のポーク卵おにぎりができる、はずだ。

康太はほとんど毎日、晩ごはん作りを手伝ってきた。お母さんから「やって」と言われると、「ええー」と口をへの字に曲げつつも、実は手伝いは嫌いじゃなかった。

フライパンでものをいためる時の箸の動かし方、卵の割り方、包丁の持ち方についてなどのコツを思い出しながら、手を動かしていく。

「泡立てないように、箸の先をボウルの底につけて、白身を切るようにささっと。右手で包丁を持って左手はネコの手で」

お母さんに言われた時は、たまに「うるさいなあ、やってるよ」と口答えしながらも、こうして一人で作業をしていると、言われた言葉ひとつひとつをちゃんと守ってしまう。

それがちょっと面白くなくて、康太は卵をかき混ぜながら、「うそつき」と、ここにはいない両親をなじった。

「子犬飼うって言ったのに」。

下唇をかむと、目頭がきゅっと押されたように熱くなった。そして、友達の家で見せてもらった、シェルティの子犬を思い出す。茶色で、ふわふわで、黒い目はくりっとしていた。

よかったらこのうち一匹の里親にならない？というお誘いに、両親は「いいねえ、うちもそのうち飼いたいと思ってたし」と賛成してくれた。あの時、康太は天にも昇る気持ちだった。

子犬を飼える。想像の中で、うちにきた子犬はいつも康太にくっついて歩いていた。家の庭で一緒に転げ回って遊ぶ。全速力でかけっこする。そのうち大きくなったら、母犬のようにシュッと鼻の長い、かっこいい犬になるだろう。

そんな幸せな夢は、子犬がくる前に突然消えてしまった。両親の仕事の関係で、五年生の修了式が終わったら、都会に引っ越すことになったのだ。

「引っ越し先の賃貸マンションは、ペット飼育可で小型犬なら飼えるらしいよ」。

お父さんは康太をなだめるように言った。でも、シェルティは狭い新居にはだめだという。だから、今は諦めるしかない。

「仕方ないよ。トイプードルでもシーズーでも、違う種類でもかわいいじゃない」。

お母さんはそう言って、こちらを説得にかかってきた。康太だって、頭のすみっこでは仕方ないと思うし、他の犬種もいいと思う。でも、やっぱり悲しくて、辛くて、泣いて抗議して、それからほとんど、両親とは口をきかなかった。それが三日前の話。まだ康太の怒りは続いている。

思い出したら、また目のあたりがじわっとした。袖でぬぐって、パックご飯をレンジで温める。

それから、薄焼き卵を作る。コンロを使うのはだめだと言われているから、お皿にラップを敷いて、といた卵液を広げるように流し入れる。それをレンジで加熱すると、外側からじわじわ固まってくる。十秒ずつ追加して様子をみながら加熱すると、ちょっと厚めの薄焼き卵ができる。

のりを置いて、中央にほぐしたご飯と、薄焼き卵と、切ったランチョンミートを重ねる。四隅の余ったのりをたたんで四角にすれば、ポーク卵おにぎりのできあが

りだ。のりから少し米粒がはみ出ているけど、いいことにする。

手を動かしているうちに、康太の気持ちは少しずつ落ち着いてきていた。シェルティの子犬を飼えないのはまだ残念だ。けど、まったく新しい場所で、違う種類の子犬を飼うことになっても、たぶん自分はその子を大事にするだろう。

康太はおにぎりを皿に移し、ダイニングの椅子に座ってかぶりついた。

お母さんの作ったものよりも塩気がうすく（たぶん、ご飯にほんのちょっとの塩を混ぜるべきだった）、ご飯も少しかたい。

でも、自分で作ったポーク卵おにぎりは味の他に満足感があった。康太は大きな口でかぶりついて、口の端の米粒をぬぐいながら「みてろよ」と言った。

もっと練習して、もっとおいしいポーク卵おにぎりを作れるようになる。新しい場所でもうまくやる。小型犬をかわいがる。

そして大人になったら、庭のある家に住んで、今度こそシェルティを飼うのだ。

やりたいことリストを心に刻みながら、康太はもう一口、おにぎりを頬張った。

河﨑　秋子（かわさき　あきこ）

一九七九年、北海道生まれ。

三浦綾子文学賞、新田次郎文学賞、直木賞など受賞多数。